帰郷者

伊東静雄

自然は限りなく美しく永久に住民は
貧窮してゐた
幾度もいくども烈しくくり返し
岩礁にぶつつかつた後(のち)に
波がちり散りに泡沫になつてひきながら
各自ぶつぶつと呟くのを
私は海岸で眺めたことがある
絶えず此処で私が見た帰郷者たちは

正にその通りであつた
その不思議に一様な独言は私に同感的でなく
非常に常識的にきこえた
（まつたく！　いまは故郷に美しいものはない）
どうして（いまは）だらう！
美しい故郷は
それが彼らの実に空しい宿題であることを
無数な古来の詩の讃美が証明する
曾てこの自然の中で
それと同じく美しく住民が生きたと
私は信じ得ない
ただ多くの不平と辛苦ののちに
晏如として彼らの皆が
あそ処で一基の墓となつてゐるのが
私を慰めいくらか幸福にしたのである